

文献を引用する意義と文献の探し方について

岩田 泰幸

1. はじめに

論文や報文といった学術的な文書は、「表題および著者名」「はじめに」「方法」「結果」「考察（結果と考察を合わせて書く場合もある.）」「謝辞」「引用文献」という構成でできあがっている。

若干の差は見られるかもしれないが、学術的な検証がなされている文書では、既出研究を例示したり、比較したりすることによって、執筆した論文や報文の新規性や意義を説明するのが一般的である。

執筆に際し「これまでにどういったことがわかっているのか?」「これまでにどういった研究がなされているのか?」という点を調べるために参照、提示するのが「文献」である。

本稿では、過去の寄せ蛾記（例えば、埼玉昆虫談話会寄せ蛾記編集委員会, 2022）で示した事柄と重複する部分もあるが、論文や報文を執筆する際に文献を引用する意義について触れたい。

また、文献を調べるのに有用なウェブサイトについても紹介するので、論文や報文を執筆する際の参考にしていただければと思う。

2. 文献を引用する意義

文献を引用することの意義は、自身が執筆している論文あるいは報文の立ち位置を明確化することにある。

すなわち、「私はこの虫が珍しいと思う。」というような個人の感覚ではなく、「埼玉県レッドデータブック動物編 2018（埼玉県環境部みどり自然課, 2018）で県絶滅危惧種に選定されているので・・・」という形で示すことにより、文献の引用によって**文章に「客観性」をもたせることができる。**

逆説的にいえば、文献が全く示されていない文書で考察を行っているならば、その考察は感想文と同質のものである。また、論文と名乗っていないながら引用文献が皆無の文書は、そこに示された事柄の根拠が不明瞭であり、検証が不十分である可能性も考えられるので、取り扱いに注意が必要である。

2.1. どういった文書を引用文献とするか

学術分野では、出版物・刊行物を引用文献とすることが基本である。これらの引用を原則とする理由は、内容の改編や変更を「勝手に」行うことができないからである。一度、印刷、発行されたものを訂正する際には「訂正記事」を示す必要があり、既に発行されたものの存在を抹消することはできない。また、雑誌が終刊しても、発行元が消滅しても、出版物・刊行物自体あるいは発行されたという履歴は永続的に残るという点も重要である。

ちなみに、寄せ蛾記表紙の右上に ISSN で始まる 8 桁の数字の羅列があるが、これは International Standard Serial Number（国際標準逐次刊行物番号）という逐次刊行物を識別するための国際コードであり、個々の逐次刊行物に固有の番号が対応する。ISSN の表示は、対象とする文献が出版物・刊行物であるかを調べる際に参考となる情報の一つである。なお、出版物・刊行物というと「紙に印刷されたもの」というイメージが先行しがちであるが、昨今では学術雑誌がオンラインジャーナルとして刊行されることも多くなっている。オンラインの場合も、逐次刊行物であれ ISSN が明記されている。また、いつ刊行されたものかを特定ができること、PDF のように内容の改編が行えないファイル形式で示されたものであること、雑誌名（掲載誌）とその掲載巻・号が明かなことなどを確認の上、引用することが大切である。

2.2. Wikipedia等を引用文献にしてはいけない

一方、引用する際に注意が必要なものとしては、ウェブサイトがある。ウェブサイトの情報を科学論文で引用することは本来、不適切である（埼玉昆虫談話会編集幹事一同，2019）。

例えば、Wikipediaは絶対に引用文献として挙げてはならない。理由は、ここまで示してきたとおり、内容の改編が日々行われているからであり、過去の記載内容を後々に検証することができないためである。

同じ理由で、個人が運営するウェブサイトやブログなども内容の改編が逐次行われていたり、ある日突然閉鎖されたりすることが日常茶飯事であるから引用するのは不適である。もし、これらを引用する場合は、但し書きをつけたり、出版物・刊行物と扱いを分けたりするなど区別する必要がある。また、閲覧日の記載も必須事項である。

したがって、できる限り、ウェブサイトやブログを引用しただけで論文や報文を書くことは避けなければならない。

3. 文献の探し方

かつて（2000年頃）は、インターネット上に公開されたオンラインジャーナルはまだ少なく、基本的に、図書館に複写依頼を出して、紙のコピーを入手するという作業を繰り返す必要があった。2022年現在、そうした様相は大きく変わり、多くの学術団体や研究機関・大学などが論文をオンライン上で公開するようになった。まったく以て隔世の感である。インターネットにアクセスできる環境があれば、情報の取得は以前よりも格段と容易になってきている。

しかし、具体的な手法として、どのようにお目当ての事柄が載った論文あるいは報文へたどり着けばよいかという点が大きなハードルであることに変わりはないだろう。

本項では、主に日本国内を対象として、学会誌等の論文検索時によく使われるウェブサイトや検索方法を一例としてお示した。引用文献を探す際の第一歩として参考にしていただきたい。

なお、寄せ蛾記をはじめとした地方同好会誌に掲載された記事は公的なデータベースへの登録がないものが多いので、注意が必要である。

本項で示す内容は、著者が所属先の機関誌に掲載したもの（岩田，2022）を一部改変した。

3.1. 検索サイト：情報の取得方法

(1) CiNii (URL: <https://ci.nii.ac.jp/>)

サイニイと読む。国立情報学研究所が運営するデータベースであり、国内で発行された刊行物（論文や雑誌記事）を検索することができる。キーワードを検索窓に打ち込むと関連する文献が列挙される。著作権などの関係により、本文が見られるものとそうではないものがある。国立国会図書館デジタルコレクション、J-STAGE、機関リポジトリ（詳しくは後述する。）へリンクが貼られている場合もある。

こういった論文あるいは報文が公表されているのかを調べる際、最初に用いることが多い。

(2) J-STAGE (URL: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>)

ジェイ・ステージと読む。科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルの無料公開システムである。使用方法は前記のCiNiiに近い。オープンアクセスの論文が多く、PDFを無料でダウンロードできるものもある。掲載誌ごとにデータが整理されている。CiNiiから本サイトにリンクが貼られている場合もある。

学会誌、大学紀要、博物館紀要などの検索、論文入手に威力を発揮する。

(3) Google Scholar (URL: <https://scholar.google.co.jp/schhp?hl=ja>)

グーグル・スカラーと読む。Googleの検索サービスの一つであり、論文や学術誌のデータにアクセスできる。検索方法はGoogleと同じである。論文の本文が見られるかは、公開状況によって異なる。全世界を

対象にしているのです、日本語以外の言語で検索をかけることもできる。

情報がインターネット上にあれば、同好会誌に関する事柄もヒットする。

トップページの標語「巨人の肩の上に立つ」は、学問は多くの先行研究の蓄積の上に成り立っているという意味であり、文献を引用する意義も体現している。

(4) 国立国会図書館デジタルコレクション (URL: <https://dl.ndl.go.jp/>)

国会図書館が運営するサービスの一つであり、同館で収集・保存しているデジタル資料を検索・閲覧できるサービスである。論文だけではなく、古典籍、官報、歴史的音源、録音・映像関係資料など、公表されているものの種類は多岐にわたる。

昆虫関連の学会では、古い雑誌などが公表されている。

(5) 同好会名で検索

埼玉昆虫談話会を含め、多くの同好会では独自にウェブサイトを開設しており、その中で過去の会誌の目次を公表していることが多い。

また、古い号については一冊まるまる PDF を無料公表している同好会も出てきている。

3.2. 論文の入手方法

(1) 国会図書館遠隔複写サービス (<https://www.ndl.go.jp/jp/copy/remote/index.html>)

前項 3.1 の (1) ~ (5) で検索した結果、該当しそうな論文や報文が見つかったものの本文が未公開となっていた場合、国会図書館の収蔵資料については、本サービスを用いて複写を依頼することができる。利用者登録が必要であり、複写料金など費用がかかる。

学会誌では、発行後に一定期間を経てから論文を無料公開する場合も多いので、そうしたケースに該当する場合には本サービスを利用するとよい。

なお、国立国会図書館には多くの同好会誌も納められているので、検索によって収蔵が確認でき、諸情報（著者、発行年、表題、掲載誌、掲載巻・号、頁）が入手できれば、同好会誌の複写も可能である。

(2) 掲載誌や発行機関名で調べる

検索により、読みたい論文の掲載誌や発行機関が明らかになったら、発行元の団体、大学名、館名などで検索すると、各機関が独自に、自身のウェブサイト等で論文を公開している場合がある。

機関リポジトリのような電子アーカイブシステムが構築されている公的機関もあり、大学、博物館、各種研究機関（例えば、農業試験場や衛生研究所）では、独自サイトを設けていることも多くなっている。

(3) 論文タイトルでもう一度検索

論文タイトルをそのまま Google などの検索エンジンに打ち込むと、PDF を見つけることができる場合もある。あくまでも「場合もある」という程度だが、前記の複写サービスに申し込む前に検索してみることも方法の一つである。

(4) 研究者名で検索

多くの研究者は自身の研究テーマがある程度決まっているので、探している論文の著者名で検索してみると、こちらで把握していない論文が見つかることも多い。既出の各検索サイトを用いる以外に、以下のような方法もある。

① researchmap (研究者検索 URL: <https://researchmap.jp/researchers>)

リサーチマップと読む。科学技術振興機構が運営する研究者データベースであり、研究者ごとに経歴や

論文リストなどを閲覧できる。論文 PDF をダウンロードできるものもある。連絡先 (e-mail) などを開示している場合もある。

② ResearchGate (URL: <https://www.researchgate.net/>)

リサーチゲートと読む。本文は英語。研究者向けのネットワークサービスであり、人物ごとに論文など業績が整理されている。論文 PDF をダウンロードできるものが含まれる。また、研究者への PDF のリクエストができる。基本的には全文英語表記であり、一定の読解力は必要である。

(5) 専門書店での購入

同好会誌を含む昆虫関連の専門書を取り扱う書店としては、以下のものがある。いずれも通信販売にも対応されており、ウェブサイトも開設されている。

① 昆虫文献六本脚 (URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>)

② 南陽堂書店 (URL: <http://www.nanyodoshoten.com/>)

4. まとめ

ここまで、論文や報文を書く上での文献を引用することの意義と、具体的な手法として文献の探し方について解説してきた。冒頭で申し上げたとおり、文献を引用することではじめて、その論文や報文の立ち位置が明らかとなり客観性が付与されるため、極めて重要な事柄である。こうしたことは、学術分野では基本的な考え方であるが、一般には浸透していないこともあってか、なかなかその重要性が理解されない場面に遭遇することも多い。

当誌 (寄せ蛾記) をはじめとする同好会誌において、文献の引用の意義といった小難しいことを示す必要はないとの意見もあるかもしれない。しかし、同好会誌に掲載された報文が地域のレッドデータブック作成時の基盤となり、各地のインベントリー調査を行う上での起点になっているという実情があるため、そういった社会的な要請がある以上は、**同好会誌であっても客観性のある記事の掲載に努める必要がある**と考える。その重要性について今一度著者各位に認識を強くしていただきたいとの思いから、今回このような形で解説を書かせていただいた。

なお、ここで紹介したこと (特に文献の探し方) については、網羅的ではなく、あくまでも初歩的なことを示したのみであるので、さらに検索を進める中で各自が自分にあった方法を模索していただきたい。

引用文献

岩田泰幸 (2022) 論文の探し方。文化財の虫菌害, (83) : 29–30. (注記: 同じものを公益財団法人文化財虫菌害研究所 HP「息抜きコラム」にも掲載。URL <https://www.bunchuken.or.jp/management/2012.html/> (2022年12月9日参照。))

埼玉昆虫談話会編集幹事一同 (2019) 引用文献の表記についてのお願い。寄せ蛾記, (173) : 67–68. (注記: 同じものを埼玉昆虫談話会 HP にも掲載。URL <http://saitama-konchu.jp/> (2022年12月9日参照。))

埼玉昆虫談話会寄せ蛾記編集委員会 (2022) 引用文献の表記についてのお願い (再録)。寄せ蛾記, (186) : 67.

埼玉県環境部みどり自然課 (編) (2018) 埼玉県レッドデータブック動物編 2018 (第4版), 419pp. 関東図書, さいたま。